第１章　アルコールを疫学的に捉える

扉のことば（上島 弘嗣）

アルコールを理解するには、もちろん基礎研究も有用であるが、疫学研究は実際に社会における飲酒習慣と健康問題に接近することのできる研究方法であり、疫学を抜きにして飲酒の功罪は論じられない。多くの疫学研究の集積によって、健康に害のない飲酒の仕方はあるのかとの問いに、はじめて答えられる。

実験結果が、複雑な人体機能や代謝に実際に当てはまるかとの疑問があるように、疫学研究の結果にも、交絡因子の影響を充分に除外できなくて、直接的な因果関係があるかどうか疑わしくなることもある。

そのようなことを念頭においた上で、多くの疫学調査結果より真理をつかむ必要がある。

この章の内容

Ⅰ．アルコールは両刃の剣である（論文番号１～４７）

Ⅱ．飲酒の適量をさぐる（論文番号４８～７５）

Ⅲ．飲酒の疫学調査法に関する問題点（論文番号７６～８１）

上島 弘嗣

１９７１年　金沢大学医学部卒業、その後、大阪府立成人病センター集団検診部、大阪大学医学部公衆衛生学教室、米国ノースウエスタン大学、国立循環器病センターを経て、１９８９年より滋賀医科大学福祉保健医学講座教授。専門は循環器の疫学。「健康日本２１」計画策定委員会・企画検討委員会委員、厚生労働省「生活習慣病班」の総括班長を務めた。